社　会　科

山　岸　郁　生
松　下　浩　一
笹　山　明　夫

1　社会科の本質について

私たちは、社会科の本質を次のように考えている。

社会の一員としての自覚を持つこと

私たちはさまざまなかかわりをもった社会の中で生きている。人と人、人と社会や自然、人と文化などとのかかわりである。そして、私たちはそれらのかかわりの中でこそ生きていくことができるのである。社会科は、その社会的事象と自分とのかかわりを明らかにし、自分が社会の一員であるという自覚を持つという意味で大切な役割を持つ教科といえる。では、「社会の一員としての自覚」とは何か。それは、自分が地域社会の一員として存在していること、あるいは日本国民の一人として存在していること、あるいは国際社会の中に生きている存在であることを自覚し、それらの社会への帰属意識を深めるとともに、さまざまな社会へ働きかけしていくことの大切さを自覚することである。

そして、社会科では、自分なりの解決方法で社会的事象に対する事実認識を積み上げながら、その事象と自分のくらしとの関連性を認識したり、社会の仕組みや変化や問題点などを自分なりの見方・考え方でとらえたりしていくことを大切にしたい。その過程を通してこそ、子どもの中に社会の一員としての自覚が促されるのであり、民主的・平和的な国家・社会の形成のために、主体的かつ創造的に働きかけていこうとする人格を育成することに大きく寄与するものと考えている。

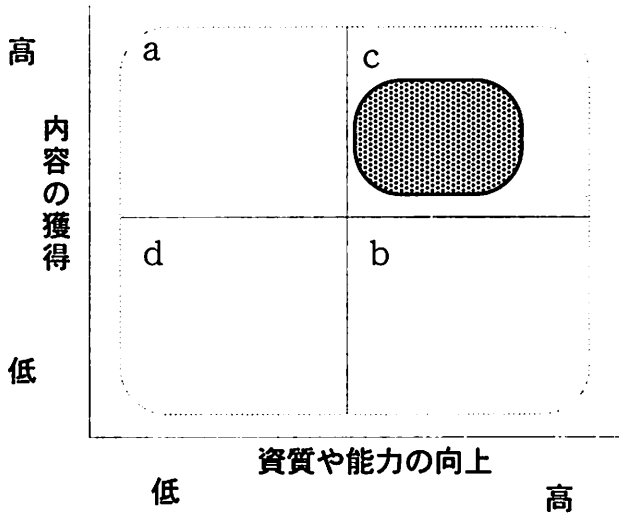
2　社会科の「学び」について

社会科で扱う内容は、自分たちのくらしを取り巻く地域社会、および我が国の産業や国土の様子、ならびに我が国の今日までの歴史と政治の働きや国際理解にかかわる事象に分けることができる。社会科の学習で扱う内容は自分たちのくらしを中心にして、空間的かつ時間的に広がりをもったものとなっており、その内容を自分のくらしとのかかわりで獲得することが重要なことである。

また、内容を獲得していく中で、身についていくであろう問題解決力を特に重視したい。また、社会的事象に対する思考力や判断力、そして、調べ活動の際に必要とされるコミュニケーション能力や自己表現力、さらには、よりよい自分や社会を求めていこうとする改善力などの資質・能力面も重視していきたい。

この内容の獲得とともに、資質・能力の向上が、すなわち社会の一員としての自覚にもつながると考える。

以上、これまで述べてきたことを「学び」の構造図に位置付けると、右図のようになる。



3　本質にもとづく基礎・基本について

それでは、社会科で大切にしたい基礎・基本とは何だろうか。私たちは次のように考えている。

社会的事象の持つ意味や働きを自分のくらしとのかかわりの中でとらえ　社会的なものの見方・考え方を身につけていくこと

上記でとらえた「社会の一員としての自覚を持つこと」という本質に迫るためには、社会的な事象の持つ意味や働きを自分のくらしとのかかわりの中でとらえることや社会的なものの見方や

考え方を身につけることが大切であると考える。
「社会的事象の持つ意味や働きを自分のくらしとのかかわりの中でとらえ」るとは、その社会的な事象が自分のくらしの中でどのような位置づけにあり、意味あいを持っているのか、あるいは、どのような仕組みを持ち、自分のくらしにどのような影響を与えているのか、などをとらえることである。このとらえが、すなわち、自分と社会とのかかわりを明らかにするとともに、自分が社会の一員であるという自覚を持つことにつながっていくのである。そのためにも、社会的事象を人々の様々な営みとのかかわりで見たり考えたり、自然・国土の様子ならびに地域や国とのかかわりなどで見たり考えたりするなどといった「社会的なものの見方・考え方」が不可欠になってくる。
そこで、様々な社会的事象に対して、自分なりの解決方法で様々な事実を収集、選択、比較・関連させながら調べ、考えることを通して、社会的事象の持つ意味や働きをとらえていくとともに、社会的なものの見方・考え方を身につけていくことが社会科の本質へとつながっていくと考えている。

4　単元を構成するにあたって

社会科において、自己の「学び」を深めるとは、社会的事象の持つ意味や働きを自分のくらしとのかかわりの中で、自分なりの解決方法でとらえていくことを通して、社会的な見方や考え方が変容したり、社会の一員としての自覚が深まったりすることである。実際の単元に下ろして実践するにあたっては、以下に述べる視点にもとづいて、単元を構成していく。

(1)　一人一人の社会的事象へのはたらきかけを促す

子ども一人一人が、社会的事象に意欲的にはたらきかけることができるように、まず、単元導入の出会いの場を工夫する。例えば、子どもにとって、身近な事象や驚きや感動を与える事象、意外性のある事象などを用意するなどの工夫である。次に、子ども一人一人の多様な思いや願いに応えるために、各自が興味・関心のもつ事象や課題や学習方法などを選択できる複線的な学習の流れを意図していくといった学習過程を工夫することである。これらの工夫により、子どもの追究意欲の持続も図っていきたい。さらに、問題意識を高めたり、自分なりの考えを確認できるような体験的な活動の場も設定していきたい。

(2)　一人一人の素朴な思いや考えの表明を促す

ある社会的事象との出会いや友だちとの考えとのふれあいなどから生まれた驚きや感動、疑問などが問題解決のスタートになることが多い。このような飾り気のない子どもの主観的な思いや考えが全体の場で出されることにより、子どもは意欲的にその社会的事象の持つ意味や働きに迫ろうと問題解決的な学習の過程へと向かうのである。よって、教師は、自分の思いを表明しやすい雰囲気を大切にしながら、子どもから発せられる素朴な思いや考えを言明されたものだけでなく、つぶやきやノートの言葉、さらに調べ活動の様子などから取り上げていくことが大切な教師の働きかけであると考える。

(3)　自分なりの見方・考え方を交流する場を設定する

自分なりに問題解決していく中で、自分の解決方法や自分の見方・考え方を振り返り見直すために、あるいは、他からの情報収集をしたくなったり、自分の見方・考え方を高めていくためにも、他の友だちの見方・考え方を交流する場の設定が必要にあるであろう。それが従来のお互いの考えを発表し合う場であったり、ディベートや討論の場であったり、ワークショップやポスターセッションの形であったりなど形態は様々である。その交流の仕方やタイミングなどは、子供の追究活動がさらに深まったり、見方・考え方が深まったりするように配慮していきたい。

(4)　子ども自身の変容の自覚を促す

社会的事象に対する当初自分の抱いた思いや考えが、追究活動の中でどのように変容していったのかを自覚することは、すなわち、自分と社会とのかかわりを自覚することにつながるとともに、問題解決的な学習の仕方を身につけることができたという自覚にもつながる。
そこで、社会的事象に対する予想や仮説を明記させたのち、自分なりの追究過程を「Thinking　ルート」などに書き表したり、学習の最後の場面では、イラストや新聞やポスターなどで表現したりすることで、自分なりの見方なり考え方の変容を自覚する場としていきたい。また、各自の調べたことを発表・交流する場でも、それぞれの追究内容ならびに追究方法に対する自己評価や他者評価する場を設けて、自己の変容の自覚を促していきたい。

5　実践例　－３年－

(1)　小単元名　学校のまわりと３つの町

(2)　目　　標　・学校の周りを探検し、特色ある地形、土地利用の様子、主な公共施設の場所、交通の様子を地図などにまとめることができる。
・学校の周りを調べることを通して、自分の学校がある地域に対して関心をもつことができる。

(3)　指導にあたって

本小単元の基礎・基本について

本校の周りには、大きく次のような町がある。平和町、長坂、野田町の３つである。平和町は、学校のある町で、住宅団地や商店街がある町である。そのため、公園なども多い。長坂は、古くからの家と新しい住宅、田畑が混在している町である。また、外回り環状線が一部通っている。野田町は、野田山の北側の斜面であり、自衛隊が大きな存在である。また、住宅や田畑もあるが、多くは墓地として利用されている。

このような地域の状況を、子どもはほとんど理解していない。普通、学校の周りの地域とは、普通その学校の校区のことである。そこには自分たちが住んでおり、普段の生活が営まれている。したがって、子どもにとってはたいへん親しみのある身近な地域ということになる。しかし、本校の周りの地域には、子どもが住んでいることは少ない。通学地域が金沢市全体であるため、学校の周りの地域とは総合活動などや通学時を通してのかかわりしかない。また、自分たちの住んでいる地域とも、子ども同士や地域の大人とのつながりは薄いと考えられる。そこで、学校の周りのことを知っているようで、実はよく知らなかったんだという思いから学習を始めていきたい。そして、地域に出て調べることから、地域の人たちとの触れ合いや自然環境や土地利用、人々の様子などに気づかせていきたいと考えた。

また、地域を知り、地域とのかかわりを持っていくことがこれからの社会生活の中では大変重要である。そこで、学校の周りの地域の学習を通して、地域の様子について調べる方法などを学習し、自分たちの地域でもそれらのことを生かして地域とかかわっていくことができるようにしたいと考えた。

そこで、本小単元の基礎・基本を次のように考えた。

・学校の周りの様子について、調べたことから「学校の周り（○○町）は○○なところだ」と自分なりの言葉で表現できること。→思考力、自己表現力

つまり、学校の周りという社会的事象のもつ意味や働きを自分の生活経験を生かして捉え、自分なりの言葉で表現できることである。そして、学校の周りの学習を通して、自分たちの住んでいる地域をもう一度見直すことができることを

単元計画　　（総時数１３時間）

	主な活動と内容	学びを深めるために
1	３年生の社会科の学習について見通しを持つ ・新しい学習だ ・３年生では身の回りのことを学習するぞ ・はじめは学校の周りのことだぞ 学校の周りはどうなっているのかな？	①②
2	学校の周りの様子について知っていることを発表する ・アルコ　市立病院　自衛隊などがあるよ ・でも　正確な場所は分からないよ ・見学に行けばよくわかるよ	①②
3	学校の周りの見学に行く 平和町2丁目ｺｰｽ:ｱﾙｺ　平和町ｸﾞﾗﾝﾄﾞ　ｱﾊﾟｰﾄ 平和町3丁目ｺｰｽ:市立病院　お店　家　ｱﾊﾟｰﾄ 長坂1､2丁目ｺｰｽ:家　ﾏﾝｼｮﾝ　ｱﾊﾟｰﾄ　田　畑 長坂町野田町ｺｰｽ:田　畑　家　お墓	①②
4	見学してきたことを地図にまとめる ・大きな地図ができたぞ ・もっとわかりやすくできないかな ・地図記号を使うともっとわかりやすいぞ	①③④
5	学校の周りの様子をまとめる 平和町は？　長坂は？　野田町は？ 附属小の周りは？ ・自分なりに学校の周りの様子についてまとめ ・お互いに発表し合おう	①②③④
6	もう一度学校の周りを確かめる	①②④

願っている。また、ここで身につけた見方・考え方が、次の金沢市全体の様子の学習にも生きていくと考えている。

学びを深めるために

① 一人一人の社会的事象へのはたらきかけを促す

まず、知っていると思っていた学校の周りの様子を実はよく知らなかったというギャップを感じさせたい。そこから調べたいという強い追究意欲を持たせたいと考えた。また、調べる段階では、実際にグループに分かれ調査活動を行ったり、自分が知りたいと思うコースを選んだりすることでも一人一人の意欲を高めたいと考えた。

② 一人一人の素朴な思いや考えの表明を促す

「学校がたくさんあるよ」や「家が多いなあ」のような最初の驚きや感動を大切にしたい。そのために発言を促すようなかかわりにとどめ、その子のなりの学校の周りの様子に対する思いや考えを認めるようにしたい。また、考えて書く時間を十分とることで「学校の周りは、緑がいっぱいだ」のような自分なりの思いや考えをしっかりと持たせるようにしたいと考えた。

③ 自分なりの見方・考え方を交流する場を設定する

学校の周りの様子について、自分なりの思いや考えを交流し合うことで、新しい見方や考え方に気づいていったり、さらに見方や考え方を深めたりすることができると考えた。そのために、「○○さんの意見を聞いて思ったのですが、．．．」のように友だちの見方や考え方についてさらに思いを発表したり、「○○さんの考えを聞いて．．．に変わりました」のように、もう一度自分の思いを振り返ったりする場面も取り入れることも考えている。

④ 子ども自身の変容の自覚を促す

調べ活動に入る前に学校の周りの様子について考えていたことと、調べ活動後に感じたこと、地図に表してから感じたことなどを比べながらまとめさせたい。そのためにも、単元のはじめから学校の周りの様子についての思いをThinkingルートとして書き表してきている。そこから学習を通して自分の考えがどう変容していったのかに気づかせたい。そして、自分なりの見方・考え方がどう変容していったのかにも気づいていってくれたらと考えている。

(4) 本小単元における授業の実際と考察

本小単元では、まず学校の周りがどんな様子なのかについて子どもたちが知っていることを話し合わせることから始めた。子どもたちは、自分の知っている学校の周りの様子についてどんどん黒板に記入していった。記入されたものを見て、子どもたちは学校の周りの様子について知っているようで、実は知らなかったんだという事実に気がついた。そこで、はじめて「これは、探検してこないとわからないぞ」という意識になったのである。そして探検の計画をたて始めた。

学校の周りの様子について、左にあるような導入段階での思いを参考にして、３人を抽出児として取り上げた。それぞれの思いを見てみると、Ａ子は、学校の周りの様子をよく知っていると思っているようである。Ｂ男は、知らないけれどよく知りたいと思っているようである。Ｃ男は、よく知らないしあまり興味がなさそうである。この三人の様子を通して、実際の授業の様子を振り返っていきたい。

主な活動と内容の実際		
・学校の周りの様子について知っていることを発表する		
Ａ子 アルコがアルコとは知っていた とてもにぎやかなところでくるまが多くうるさかったなあ	**Ｂ男** アルコとバザールとはしっていたよ このべんきょうで学校のまわりがいっぱいわかるだろうな	**Ｃ男** なにも知らないよ
自分の知っている学校の周りの様子を発表しての思い		

導入段階での思い（前頁）や探検前の思い（左中央）から考えると、Ａ

・学校の周りの見学に行く
　A子、C男　：　長坂町、野田町コース
　B男　　：　平和町３丁目コース

図１「学校の周りたんけん地図(探検前)」

A子	B男	C男
家がたくさんあってお店もたくさんあってマンションや田んぼ(はたけ)もたくさんあると思う	たぶん店など家というたてものがいっぱいあって、人が多いと思う	店が多くて、家やみどりは少ないだろう

探検に出かける前の思い

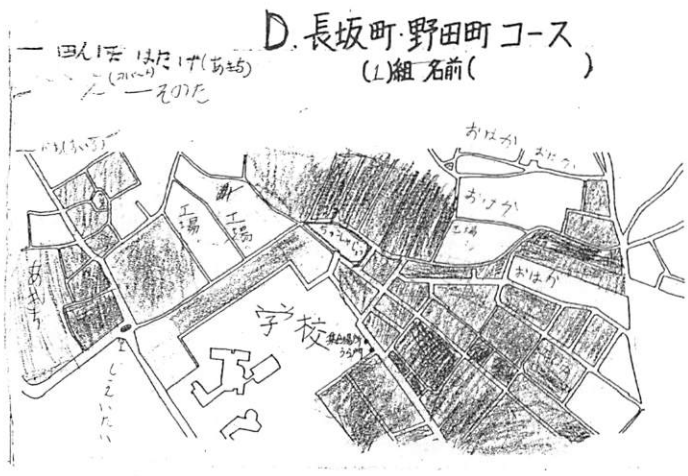


図２　「学校の周りたんけん地図(探検後)」

子とＢ男は、バス通学をしており、バスの中からやバス停から見えるものをよく知っている。しかし、裏通りに入ったところにあるものには気づいていない。また、Ｂ男は学校の周りの学習に意欲的で期待感も持っているようである。

それに対してＣ男は、同じバス通学だが、周りの様子にはあまり気づいておらず、あまり意欲的とはいえなかった。

また、Ａ子とＢ男は探検の地図や窓から見える景色を参考にして予想を立てていたが、Ｃ男はバスから見慣れたバス通りの風景から考えていた。

実際に探検に出かけると、Ｃ男もＡ子やＢ男と同様に意欲的に町の様子を調べまわっていた。

それは、見学のコースを四つに分けたことも原因の一つではないかと考える。コースは、見学のしやすさや安全なども考慮し、バス通りと町会で分けたのだが、バス通学ではあまり通らないコースがあったり、通りは見ているがその奥までは行ったことがなかったりするコースになっていたからである。また、コースを自分で選んだことも意欲を高めたことにつながったと思われる。そして、Ａ子とＣ男は、自分たちとはあまり関係のない長坂、野田町コースを選び、Ｂ男は、バス通りの裏側を選んでいた。

探検後の思い（左）を見てみると、Ａ子は家の

A子	B男	C男
おうちがいがいに多かったのがびっくりしました。ふつーの家が多くてアパート、マンションは少なかったです。工場がぽちぽちありました。田んぼが多くて畑が少なかったです。おはかもありました。	よそうと同じでたてものがいっぱいありました。人も多かったです。	家と緑にあふれていた。予想とは大違いだった。

探検をした後の思い

・見学してきたことを地図にまとめる

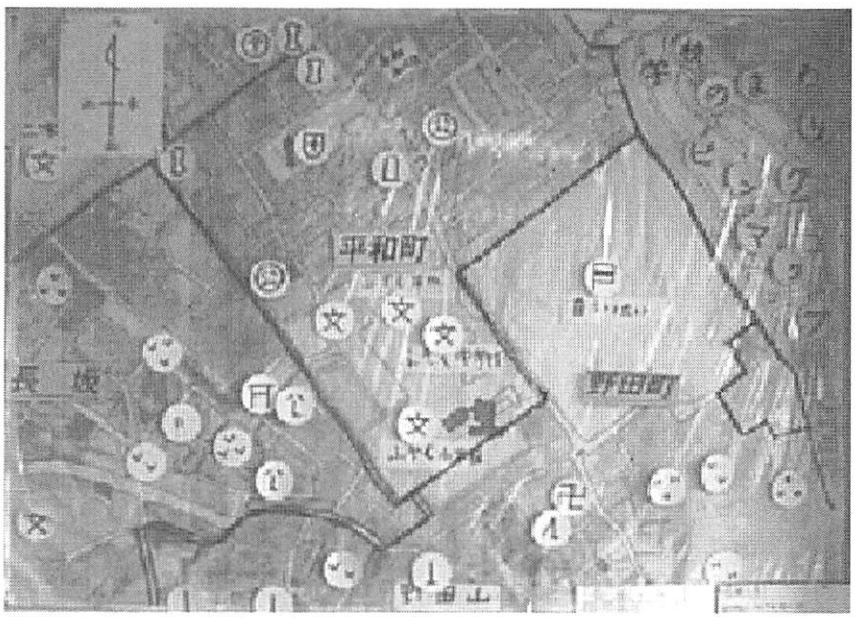
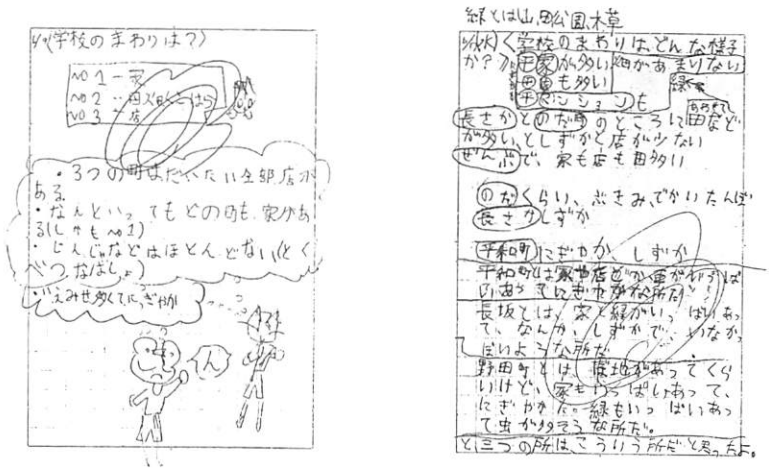


写真１　「できあがった学校の周りの地図」

・学校の周りの様子をまとめる



学校の周りの様子の自分でのまとめ（A子とB男）

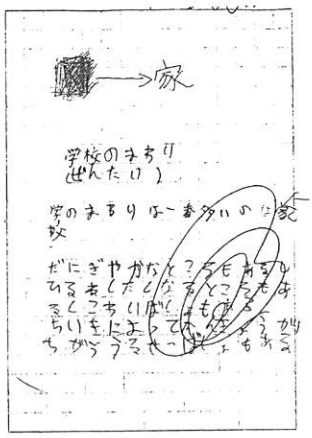
数が意外に多かったと驚いている。これは日頃、通りの正面を見ることが多いので、その裏にある家に気づいていなかったからであろう。実際の町を歩いてみることで町のイメージが広がってきたと考えられる。

「あふれていた」ということばを使っていることからみて、C男にとって見学したことがたいへん衝撃的だったようである（左）。初めは意欲があまりなかったが、これ以後たいへん意欲的に学習に取り組むようになった。これは実際に探検に出かけるということがいかに効果があったかということである。

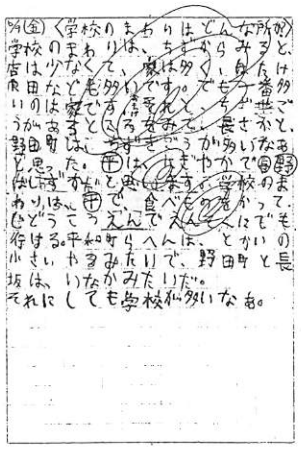
また、探検には、それぞれの町の地図（図１）を持たせた。また、細かく調べることは時間的にも無理なので、店は黄色、家やアパートはピンク色、田や畑などは緑色と大まかに色塗りするようにした。このように（図２）三色で塗り分けることで、探検後に大まかな町の様子がつかみやすくなったのではないかと考える。

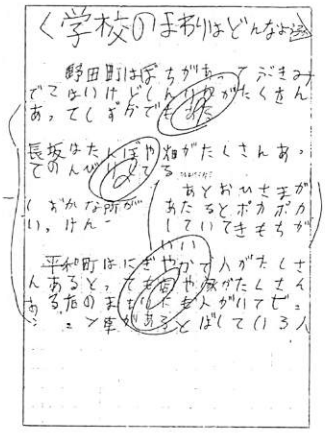
その後、それぞれが調べた地図を、わかりやすいように１枚の大きな地図にまとめた。出来上がった地図には、方位や町の名前、地図記号を記入した。こうして、大きな学校の周りの地図が完成し「がっこうのまわりビッグマップ」という名前までついた。

A子は自分なりのまと



学校の周りの様子の自分でのまとめ(C男)





学校の周りの様子の意見を
聞き合った後のまとめ

・自分なりに学校の周りの様子についてまとめる

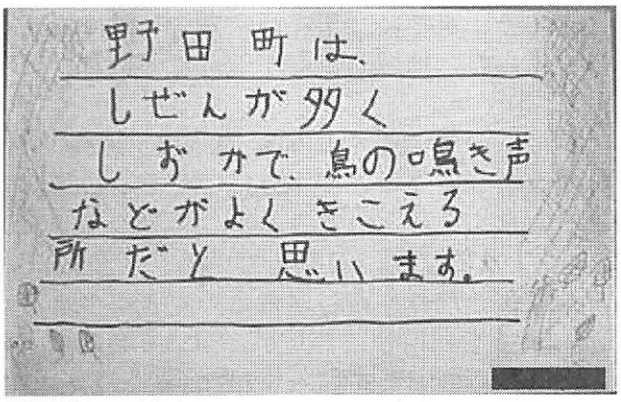


写真２　A子のまとめ

め（前頁）では、まだ見学に行ったときの印象が強く残ったまとめ方をしている。３つの町それぞれについて細かくまとめている。しかし、友だちの様子を聞き合った後は（左）、逆に学校の周り全体ということを強く意識したまとめをしている。このことは、教師からの「全体としてみたらどうか」という働きかけがあったからだろうと考えられる。

Ｂ男も、Ａ子と同様に自分なりのまとめ（左上）では、３つの町それぞれについて、自分なりの思いで書いている。そして、聞き合った後のまとめ（左）でも、やはり全体について書いている。その後は、地図記号に着目して学校の周りの特徴を捉えようとしている。このことは、地図記号を学習したことで、それを生かそうとしていることを示している。つまり、地図記号の学習が次の活動へつながっていると考えられる。

Ｃ男も、自分なりのまとめ（左上）では、見てきたことや出来上がった地図を見て書いている。そして、聞き合った後はやはり全体としてのまとめになっている（左）。そこで目をつけているのは家である。学校の周りで一番多いのが家だと捉えている。そして、町（地域）によって環境が違うとまとめている。調べたときやまとめたときの地図を三色で塗り分け

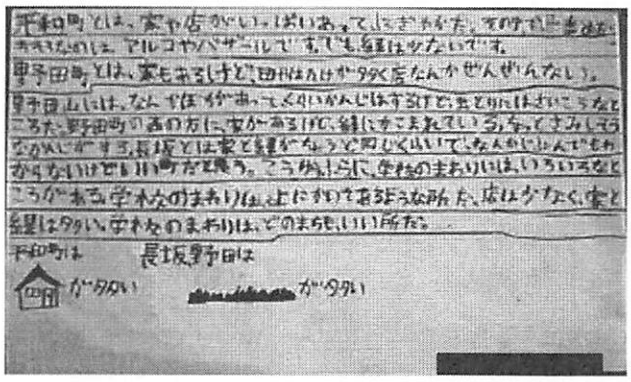


写真３　Ｂ男のまとめ

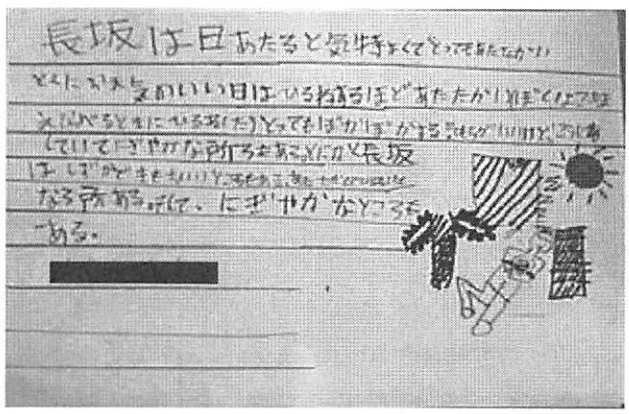


写真４　Ｃ男のまとめ

てきたことがここで生きていていると考えられる。また、これまでの学習の中で、地図の見方が身についてきていることや、見学をしたり、全体として捉えることを通して社会事象に対する見方も育ってきているのではないだろうか。

学習の最初に思っていた学校の周りの様子と学習の最後にまとめたものとを比べてみた。

Ａ子は、見学に出かけた時のことをしっかりとふまえて野田町のことを取り上げてまとめを書いている（前頁）。学習していく中で、バスの中から眺めている町より、実際に自分の足で歩いて調べた町の方に愛着が湧いてきたと考えられる。

じかんが多かったから、みんなでじっくり考えたからおもしろかったよ

Ａ子の感想

Ｂ男は、最初に書いている通り、学校の周りの様子を３つの町それぞれをしっかりと特徴づけてまとめている（上）　。内容も学習した店、家、田んぼなどにわけてしっかりと書いている。学習したことがしっかりと生かされていることがわかる。

Ｃ男は、はじめ学校の周りそのものにはあまり関心を持っていなかった。内容も家や店といった土地利用についてはほとんど書いてない。しかし、最後のまとめには心情的な内容が多く含まれている（上）　。

三人ともに言えることであるが、時間をかけ、視点をしっかりと持たせて見学させていくことで、自分たちの学校の周りに愛着が湧いてきたのであろう。このことは、上に示すＡ子の感想にはっきりと表れている。

本小単元で身につけさせたいと考えていた基礎・基本は『学校の周りの様子について、調べたことから「学校の周り（○○町）は○○なところだ」と自分なりの言葉で表現できること。→思考力、自己表現力』であった。今まで見てきた限りでは、本小単元の学習を通して、十分に身につけさせることができたのではないかと考える。また、今まで通学途中に通り過ぎるだけであった、学校の周りについて新たな発見が多く見られ、地域を見直すことにもつながっていったと考えられる。

それでは、学びを深めるために考えた項目について考えてみる。社会的事象へのはたらきかけは、探検に出かけたりそこで人々と触れ合ったりすることで十分にできるようになったと考えられる。また、自分の見方や考え方を発表したりすることもできるようになってきた。ただ、子ども同士のつながりがもう少しできるようになってほしいと感じている。自分の考えは発表するが、友だちの発表に対しての反応があまりなかったり、新しい考えの発表が少なかったりした。変容の自覚を促すために社会科Thinkingマップを利用してきたが、初めての利用ということもあり、まだまだ検討が必要である。しかし、これらの実践を積み重ねながら、自分なりの見方、考え方ならびに調べ方の変容に気づいていけるように今後実践を進めていきたい。